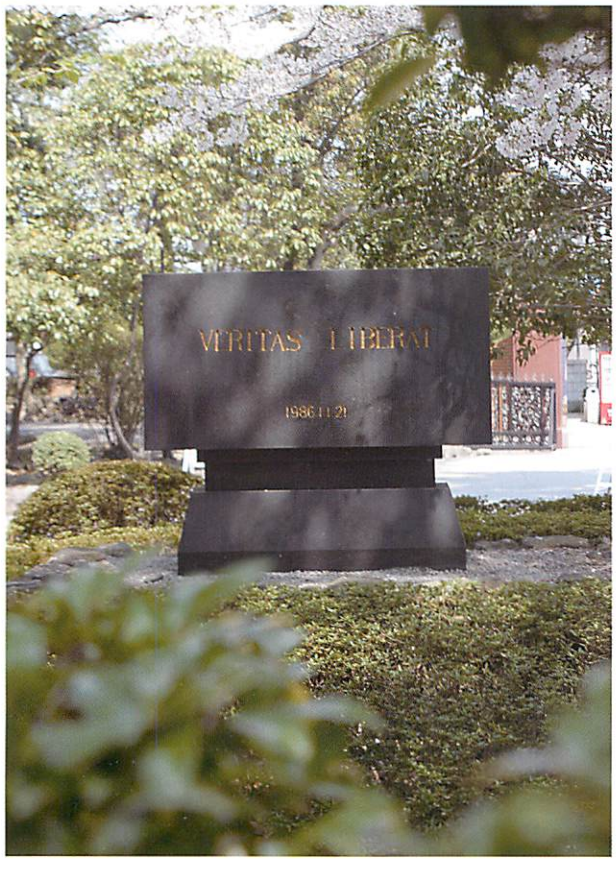
BEPPU UNIVERSITY
平成30年（2018） 3月20日

ARGONAUTES
別府大学図書館報

アルゴノートNo.52

CONTENTS

大学の「2018年問題」の到来に応じるための
ヒントを探る～別府大学の根～ 今井 航
雑誌『AVRIL』（アヴリル）…… 吉岡 義信
司書にとって専門をもつということ… 尾籠 恭平
図書館見学ツアー 2017
わが著書を語る…… 安松みゆき
飯坂 晃治



大学の「2018年問題」の到来に応じるためのヒントを探る ～別府大学の根～

今井　航

18歳人口は1992年を境に減少し、2009年以降は120万人前後で横ばい状態が続いた。2018年からは再び減少局面に入り、14年後の2032年には100万人を割り込むと予測されている。再び減少局面に入ることで今後の大学経営環境の一層の悪化が懸念されることから「2018年問題」と呼ばれている。

日本私立学校振興・共済事業団は、私立大・短大を運営する全国の660法人の2016年度時点の収支や資産を分析した。その結果、2019年度末までに破綻の恐れがある「レッドゾーン」は21法人（3.2%）、2020年度以降に破綻の恐れがある「イエローゾーン」は91法人（13.8%）、経営悪化の兆候が見られる「イエローゾーン予備軍」が175法人(26.5%)、経営状態には問題がない「正常」が373法人(56.5%)と分類されている(『讀賣新聞』（西部）2017年12月31日朝刊1面)。なお、法人名は、開示されていない。

ところで、2016年に名古屋大学出版会から『新制大学の誕生』(上下)が上梓された。その著者は、近年『大学の誕生』（上下、中央公論新社、2009年)、『高等教育の時代』（上下、同、2013年）と相次いで日本近現代高等教育の通史を上梓した天野郁夫である。この下巻でエピローグを直前にして天野は、本学の前身である別府女子大学の例を取り上げている。『別府大学の三十年』(佐藤学園・別府大学、1978年）を参考に、戦後まもなくの1946（昭和21）年5月に別府女子専門学校が誕生した頃の様子を紹介したうえで、この女専の第1期生の回顧や、大学としての設置認可に至る経緯を語った座談会の記録などを引きながら、別府女子大学が「貧しい女子専門学校のごく短い歴史の上に、多くの困難を抱えて出発した」と述べている。

その後1953・54（昭和28・29）年とも卒業生数は僅か3名にすぎず、「当時巷間に別府の七不思議というのが流布していたが、その一つに別府女子大が入っていた。学生がいないのに教授があまたいるというのが不思議の理由だった」という初期の卒業生の回顧も引用されている。

天野は、本書の最後で、別府女子大学を例に新制大学のボトムラインともいうべきものと、その実態を見ようとし、「専門学校から「昇格」を果たした多くの新制大学にとって、設置認可は「大学としての出発」ではなく、「大学への出発」にすぎなかったと見るべきだろう」と結んでいる(天野郁夫『新制大学の誕生』下巻、720～722頁)。

同書では、「敗戦から新制大学発足までの期間、とくに1946・47（昭和21・22）年の両年が、旧制度による大学・専門学校の新設ブームの時期であったこと」も指摘されている(512頁)。とくに、この時期における女子の専門学校の急増ぶりは注目に値する。その新設は、公立13校、私立33校であった。後者の私立の女子専門学校33校のうちに別府女子専門学校が含まれる。この33校のうち新制度により「昇格」を果たした大学は僅か5校にすぎなかった。実は、ここに別府女子大学が含まれる（515～516頁)。

全国を見渡せば、ほかにも日本女子大学や津田塾大学など私立の女専を経て大学や短期大学に移行した例を挙げることは難しくない。ここで、あえて九州に限ってみれば、私立の女専を経て大学に移行した例は、別府女子大学だけと見られる。当時の学生募集広告には「別府女子大学は九州唯一の私立の四年制女子大学で」と記されている(『別府大学の三十年』、41頁)。活水女子、西南女学院、東筑紫女子、純心女子などの各女専は、いずれも1950(昭和25)年に短期大学に移行する。

西山伸（京都大学）は、「概ね安定的に移行を果たした旧制私立大学群に対して、旧制私立専門学校、中でも敗戦前後に置かれたそれの場合は、廃校や短期大学への移行を選ばざるを得なかったものも少なくなかったことが述べられる。これらの教育機関にとっては、新制移行は淘汰の過程であったとされている」と同書を紹介している(『日本の教育史学』第60集、日本図書センター、2017年、170頁)。本学の前身である別府女子大学は、敗戦後の厳しい淘汰の過程をくぐり抜けて

「大学への出発」を果たした九州唯一の私立女子大学であったと言えよう。その誕生には、いったい何があったのか。

2017年12月16日（土）に別府大学メディアホールで開催された「シンポジウム九州学 Vol.4」に出席した。王敏（法政大学）による講演「佐藤義詮氏の友人黄瀛先生の人柄と学問」のあと「別府大学の建学精神とはなにか」をテーマにシンポジウムが行われた。王は、かつて重慶市にある四川外語学院で黄瀛氏に師事していた。彼女は、黄氏と旧知の仲であった本学の創立者である佐藤義詮が四川外語学院との姉妹校提携を結ぶために1985（昭和60）年に中国を訪ねた際、上海市で佐藤を団長とする一行を出迎えたそうである。シンポジウムで語られた王の言葉を紹介する（2018年1月22日に御本人よりその許可が得られた）。

> （前略）。飛行機から下りられたときは、佐藤先生は杖を御使いでした。歩くこともそうできそうにありません。そのときは非常に心配いたしました。このような健康状態で、医療環境も、交通環境も、生活環境も、すべて日本と比べられない中国にどうしていらっしゃるのか。佐藤先生に私は「どうして」と尋ねました。佐藤先生は答えました。「どうしても黄瀛先生に会いたい」。会いたいという気持ちはよくわかりますが、しかしやはり健康状況を考えるのが普通であることを伝えましたが、それに対しては何もおっしゃることはありませんでした。その次に、私は「佐藤先生はどうして別府でしかも女性、女子教育関係の大学をおつくりになったのでしょうか」と尋ねました。佐藤先生は答えました。「戦後の日本とくに九州の女性たちはたいへん生活が苦しい環境のなかにいました。教育を受けられる機会が少なく一部の女性はアメリカ軍の兵士と付き合い、そして従来の日本女性のあるべき生活、あり方ができなくなりました。それをみて心を痛めました。なんとかしたい。なんとか地元の女性に、とくにまともな人生をしてほしいと思うようになりました。そのためにできることはやはり教育をしなくてはなりません。そこで女子教育を始めました」。この言葉に当時わたしは心を打たれました。（後略）。

敗戦後の九州唯一の私立女子大学の誕生には、創立者のこうした並々ならぬ思いがあったのである。同じく心を打たれた。

松尾芭蕉の弟子の向井去来は、芭蕉の俳諧の心構えを『去来抄』にまとめている。そこに「不易を知らざれば基たちがたく、流行を知らざれば風新たならず」とある。基本を知っていても時代の変化を知り革新していかなければ進歩はない一方で、普遍的な真理を知らなければ基礎は築けない。

おもえば、昨年2017年4月に佐藤義詮記念館（新18号館）が開館したが、本学に40年以上お勤めであった山本晴樹名誉教授は、「ようやく大学らしい建物が建った」と仰っていた。今後2020年となれば「大学への出発」を果たした別府女子大学の誕生から70年の節目を迎えることとなる。本学は、およそ70年をかけてようやく「大学としての出発」を果たそうとしているのではないか。長い時間をかけて底に強く深く根ざしている基礎のあるかぎり、いよいよ到来した新たな淘汰の過程であっても、きっと本学は沈むことなく耐え抜いていける。

（別府大学文学部教職課程 教授）

雑誌『AVRIL』（アヴリル）

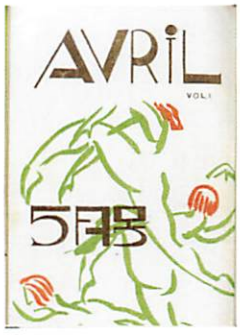
吉　岡　義　信

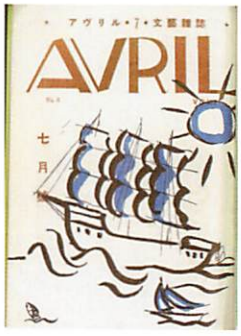
創立者の佐藤義詮先生と文化学院時代の同期でもあり、本学の教授でもあった中込純次氏の著作『文学に現れたパリ』（1978年　三笠書房）の「おもいでの糸―文化学院と同人雑誌―」の中に雑誌

『AVRIL』について次のような記載があり、「義詮」という名前が記されている。

それから、翌年の四月私が渡仏する前後に、私たちは二つの雑誌を創刊した。一つはAVRILという大型の雑誌で、筆者は創作欄に吉川由貴夫、西脇マジョリ、横山春夫、亜井植夫、高津三吉、詩欄に高津、中込、評論・感想欄にマジョリ、義詮、斉藤圭司、翻訳欄に藻風「ジュール・ルナール」、中込「ポール・モーラン」等である。表紙はマジョル、カットはコクトーその他である。

この雑誌は本学にも国立国会図書館にも所蔵がなく、何号まで発行されたかは不明であるが、大分県立図書館に3号まで所蔵されていることが判明した。発行所は東京のヴァリエテ社となっている。以下目次により佐藤義詮先生の書かれたものを紹介しておきたい。





第1号（昭和4年5月）

創作

豫期せざる聖賢	吉川由貴夫
Hermaphrodite	西脇マヂヨリ
ロマンス（ジヤン　デボルト）	横山春夫
コント三種	中込純次
黄色い七面鳥	亜井植夫
廣東の珠迪（ポウル　モーラン）	中込純次
廣告塔（その他）	高津三吉

詩

苑中語（ジュウル・ルナアル）	竹友藻風
昔の春	高津三吉
二月の雪	中込純次
結婚の歌	J・P　H
沼田風景	アランデル・デル・レ
薔薇	A I U E O
墓標進過	冨田　達

評論　感想

秘密の職業（ジヤン　コクトオ）	横山春夫
Fasti et nefasti dies	A I U E O
アルヘンチイナ	西脇マヂヨリ
文藝批評序説	佐藤義詮
歌舞伎批評	HAPPY・HIT
新劇批評	齋藤圭司
情熱の墓場	佐藤義詮
シネマ	
編輯後記	
挿畫　カット　其他	ヴアンモツペ、ガラニス、ラポリユウル カルジエ、コクトオ、マアジヨリイ
表　紙	マヂヨリ

第2号（昭和4年6月）

創作

千一夜亜剌比亜夜話（バアトン）	呉　梅子
匿名の手紙（ジヤン・デボルト）	横山春夫
さらばロメオよ	高津三吉
Hermaphrodite（二）	西脇マヂヨリ
ラメセスのスカラツプ	吉川由貴夫

詩

衞生學	新居　格
ステツキガール	高津三吉
悪魔の寺院	佐藤義詮
彼の女を忘れた（聞一多）	黄　瀛
C I F S	亜井植夫
春姫謡三首	呉　眞
別詩他一首	中込純次

評論　感想　漫筆

新精神（L'esprit nouveau）	佐藤義詮
ワイルド抄	參太郎
不可能の告白	西脇マヂヨリ
ジヤンデボルド（ジヤン コクトオ）	横山春夫
アンチプロレタリア藝術論	佐藤義詮
？	冨田　達
ナンセンスレビユウ	雅谷　亭
歌舞伎批評	斯波二三緒
六月	亜井植夫
新劇批評	齋藤圭司
Tertium quid	詮莫耶
TEA・TIME	
編輯後記	
挿畫　カット　其他	コクトオ、マヂヨリ其他
表　紙	マヂヨリ

第３号（昭和４年７月）
創作
生命は生々として居る（ジヤン・デボルト）　横山春夫
ＡＮＮＵＩ　亜井植夫
重い足　岸井よし緒
千一夜亜剌比亜夜話（バアトン）　呉梅子
詩
馴鹿　竹友藻風
トーキー―今様口説―　高津三吉
嘆き　西脇マヂヨリ
ＣＩＦＳ　亜井植夫
CARMINA―パビリオの唄―　Ｓ・Ｒ・Ａ
擬兒歌其他劉半農　黄瀛
月の子守歌數　岡田恵光
評論　随筆　其他
PERIPATOI　莫耶荘
詩集ペリカンに就いて　津久美凉
二つ心中　よし緒
藝術價値其他　佐藤義詮
三段論法　吉川由貴夫
今日　高津三吉
リギヱラ（ポオル・モオラン）　川井生
戀（クロオド・アネヱ）　參太郎
十番目のミユウズ　古川伸二
新劇運動の進出（二）　齋藤圭司
編輯後記
カット　ラトウル、マヂヨリ、山岡與平其他
表紙　マヂヨリ
（附属図書館 事務部次長）

司書にとって専門をもつということ

西九州大学図書館司書
尾籠恭平

私は３月に大学院を卒業したての新人司書です。なので本来は司書になった動機を書くのが基本でしょう。しかしそれは前号にも同じようなものがありますから、皆さんが大学で勉強していることと司書の仕事の間につながりがあることを私の中心的な業務である図書受入れを参考にして紹介したいと思います。

大学図書館は各学部の専攻に適した分野の本が充実していなければ、学生と教員にとっては不便な図書館になってしまいます。そうやって専門に合致した本を受け入れていると時折教員から大規模な寄贈が来ることがあります。だれだれ先生の文庫等といって、すでに絶版となった古い本や図書館に受け入れることができなかった本などが詰まった貴重なコレクションとなります。私は大学院在籍時代にアルバイトとして担当したのは本誌第48号で山本晴樹先生が書かれている「西洋古典文庫」の作業でした。西洋古典文庫はその名の通り西洋古典（ギリシャ・ローマ時代）が中心となります。山本先生のもと修士論文に励んでいた私としては自分が学んできたことを生かせる実にやりがいのある作業でした。この文庫が抱えていた大きな難点として、西洋古代史を研究する上で欠かせない英・仏・独・伊・希羅といった言語の本の分類に多くの時間を費やさなければならないことです。とりわけ馬場文庫は社会経済史関係や農業史関係の本が多いですから、内容を確認してから分類した方がより確実になります。私がボランティアとしてアルバイトとして作業をしていた間に２つの文庫においてほとんど終わらせることができ、夏に目録を発行することができました。この作業を通して司書への道を確実にした専門を活用できる有意義な作業となりました。

そして私は３月に大学院を卒業して西九州大学に勤めることになりました。この大学では何年か前に古川孝順教授から寄贈を受けていたそうで、そのコレクションの整理作業を通常の業務と平行して整理することになりました。古川先生は長い間東洋大学で勤務され、その後故郷の佐賀県にある西九州大学へと来られ、定年後に本を寄贈されたそうです。専門分野は社会福祉学とりわけ最初は児童福祉、その後イギリスを中心とした社会福祉史を専攻されたようです。私は社会福祉についてあまり詳しくなくその作業は難航しています。

洋書は社会福祉史が中心ですが、それはNDCの分類において369ということになります。もちろん「Social Welfare」というタイトルの本ではこの通りの分類でつける場合がほとんどです。ですが古川先生の専攻である社会福祉史は決まった分類がないため、貧困、児童、社会病態といったそれぞれの分野に分かれることになります。そしてそれが本当に教員や学生にとって利用しやすい分類になっているかどうか分類をしている私にはわからないのです。幸い現状教員向けへの貸出しは順調のようですからある程度は問題ないのかなと思っています。ですが改めて分類に役立てるために社会福祉関係の概説書から手をつけはじめました。このコレクションの整理は専門ではない分野の難しさと、常に勉強を続けていかなければならないということをあらためて教えてくれています。

簡単な紹介にとどまり具体的にどこをどう苦しんでいるということまで書くことはできませんでしたが、今学んでいる勉強と司書が繋がっているということは書けたのではないかと思います。大学院まで進んで勉強をするということはなかなかに大変なことであり、そうそうできるものではありません。ですが司書になろうという学生のみなさんは今図書館学以外の学問を各学科でがんばっていらっしゃると思います。それは司書にとって決して無駄な時間ではなく今後必ず役に立ちます。それを思って今後も勉強を続けてください。

（史学・文化財学科 2015年3月卒業　大学院文学研究科歴史学専攻博士前期課程 2017年3月修了）

図書館見学ツアー 2017

2017年11月12日、司書課程と附属図書館共催による第9回図書館見学ツアーを行いました。学生13名、教職員8名で宮若市立図書館と西南学院大学図書館を見学しました。

宮若市立図書館は2012年に開館、生涯学習施設との複合施設で、図書館は一部2階建ての構造となっていました。2班に分かれ交互に職員の松尾知哉氏（史学・文化財学科 2016.3卒）から概要説明があり、職員の津田亜希子さんに施設案内をしていただきました。館内は「おはなしのへや」を設けた子ども向けのコーナーや、地域の本、暮らしの本、芸術・大型の本といった様々な閲覧スペースがあり、利用者のニーズに合わせた工夫がされていました。宮若市ではブックスタート事業として、絵本の贈呈や司書による赤ちゃんへの本の選び方の説明などをおこなっています。また、図書館では、家族で本を読んでもらうための「家読（うちどく）」貸出セットや、市内各所に設置された「本旅」で図書館へなかなか行けない人にも読書の機会を持ってもらうなど、館内にとどまらない様々な取り組みがなされていました。

西南学院大学図書館は2017年4月に新館が開館したばかりで、職員の山下大輔、小川ゆきえ氏が休日にもかかわらず出勤して案内していただきました。

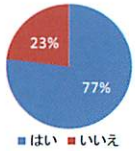
中央は吹抜けで7階の自動書庫から順次1階まで説明していただきました。収容冊数は180万冊（うち自動書庫約80万冊）、これまでの蔵書数は120万冊とのことです。4階から6階はサイレントゾーンで静かに学習する場であり、1階から3階はアクティブゾーンで話し合いもできる空間となっています。1階は多目的ホール、ディスカッションエリア、ブラウジングエリア、

ライブラリーカフェなど、２階はラーニングサポートエリア、グループ学習室（30名用２室、15名用４室、８名用４室）など、３階はSAINSルーム（PC125台）、情報検索室（PC35台）、視聴ブース（16席）など最新の図書館設備が設けられ学習環境として十分で、休日にもかかわらず利用する学生が多く平日は満席状態だそうです。参加者からも「最新の設備やシステムが導入され勉強になった。」「自分が知っている図書館とは違い、認識の狭さを痛感した。」「これまで利用してきた図書館とは違う施設で視野が広がった。」などの意見がありました。

アンケートの集計結果は以下のとおりです。

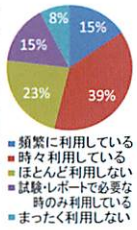
1、司書課程の講義を受けていますか。

	回答数	割合
は　い	10	77%
いいえ	3	23%



2、普段、公共図書館や他の大学図書館の利用頻度はどれくらいですか。

	回答数	割合
頻繁に利用している	2	15%
時々利用している	5	39%
ほとんど利用しない	3	23%
試験・レポートで必要な時のみ利用している	2	15%
まったく利用しない	1	8％



3、別府大学附属図書館の利用頻度はどれくらいですか。

	回答数	割合
月に１度程度	2	16%
２・３週間に１度程度	2	15%
１週間に１度程度	3	23%
２・３日に１度程度	3	23%
毎日利用する		
試験・レポートで必要な時のみ利用する	3	23%
まったく利用しない		

4、ツアーの開催時期についてどう感じましたか。

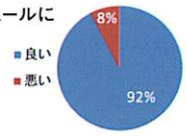
	回答数	割合
良　い	13	100%
悪　い		

5、4の答えの理由をお書きください。9件の回答

・学祭が終わったあとなので
・予定が無かったため。
・過ごしやすい気候。
・あまり忙しい時期では無かったからです。
・ちょうどイベント行事が終わったくらいだったから
・実習が終わったあとだったため、参加することが出来たから。気候もちょうどよく、動きやすいです。
・気候が良いから
・正直、良いか悪いかと言われましたら、良いという感じです。正直、休みたいときはドッピリと休みたいです。
・学祭が終わった後で何もなかったのでよかった。

6、ツアーのタイムスケジュールについてどう感じましたか。

	回答数	割合
良　い	12	92%
悪　い	1	8％

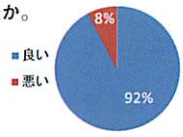


7、6の答えの理由をお書きください。7件の回答

・段取りが悪い
・ツアー参加者の事を考えられていたため。
・昨年参加した時よりもゆっくりと見学できたからです。
・各図書館で程よく見学出来たから
・学べる時間はとてもたくさんありました。ただ、残念なのは交通時間がとても長いです。
・休憩時間もしっかりあって、トラブルがなかったから。
・１時間ほど見学できたから

8、見学先はどう感じましたか。

	回答数	割合
良　い	12	92%
悪　い	1	8％

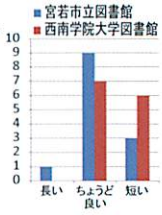


9、8の答えの理由をお書きください。10件の回答

・２つ見学するが質にばらつきがある
・見たことないことが多かったため。
・公共図書館では利用者が利用しやすいように考えられていて勉強になりました。大学図書館では別府大学に　無いものがあって見ていて楽しかったからです。
・今まで利用してきた図書館に比べて全く違った施設だったので視野が広がった
・興味を引くような面白い取り組みを知ることが出来たり、館内デザインの工夫を見ることが出来たから
・建物が新しく、システムや設備も新しいモノが取り入れられていて、勉強になったから
・自分の知っている図書館とは全く違い、認識の狭さを痛感した。言葉では理解したフリは出来ても、見てからこそ理解できるものがあった。
・何かと綺麗で設備も整っていてよかった。
・学校や大分市の図書館とは違う試み、デザインを観ることができたから。
・１時間ほど見学できたから

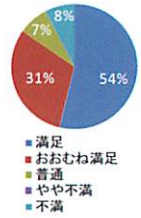
10、見学時間はどうでしたか。

		回答数
宮若市立図書館	長　い	1
	ちょうど良い	9
	短　い	3
西南学院大学図書館	長　い	
	ちょうど良い	7
	短　い	6



11、引率教員の対応はどう感じましたか。

	回答数	割合
満　足	7	54%
おおむね満足	4	31%
普　通	1	7%
やや不満		
不　満	1	8%



12、見学ツアー全体を通しての意見・感想をお書きください。見学ツアーで行ってほしい場所、改善してほしい点など、お気軽にどうぞ。7件の回答

・段取りが悪い
・普段行けない図書館へ行けて視野が広がった気がします。色々な図書館の内情を詳しく知れてよかったです。
・去年、友人達と参加して非常に楽しく学びも多かったため今年も参加させていただきました。
講義で学んできたことを軸に自分の目で様々な図書館を見て回ることで、学びを深めたり、新たな発見に出会えることができ、良い経験になりました。無料でツアーを開催していただけていることもありがたいです。私は今年度で卒業ですが、今後もこのツアーが続くと良いなと思います。ありがとうございました。
・宮若の図書館は新しいだけでなく、取り組みやコーナー作りが前衛的で、大分にもあって欲しい図書館でした。
西南学院大学の附属図書館は、細部までデザインが施されていて、居心地も良く、ずっと居たくなる図書館で羨ましかったです。大分にも今回見学したような図書館が出来ることを願います。
・とても良いです。色んなことを知れましたし、各図書館での運営内容を知って、納得いくような点も所々で見受けられました。ただ、せっかくのグループ分けをしたのですから、最後の方に至ってはグループの意味はありませんでした。ですので、そのグループ分けを利用して、グループ内で各図書館で感じたことを話し合ったりするのはどうでしょうか？十数分だけでも。
・普段入ることのできない図書館と書庫を見ることができてよかったです。最新システムを見て、驚きの余り開いた口が塞がりませんでした。とても貴重な体験ができてよかったです。この機会に他の図書館も見学してみたいなと思いました。また、来年も見学ツアーがあったら参加したいとおもいます。
・満足でした

わが著書を語る

『ナチス・ドイツと〈帝国〉日本美術 歴史から消された展覧会』

吉川弘文館
2016年2月10日発行
定価　4,500円+税
254,ii頁

文学部国際言語・文化学科
安　松　みゆき

戦争の布石となった美術展を平和のために振り返る

本書は2012年に早稲田大学に提出した博士論文の一部を基に、その後の知見を加えて、新たに文章に書き起したものです。東京芸術大学教授佐藤道信先生より推薦いただき、吉川弘文館から刊行されることになりました。

主題とした1939年の「伯林（ベルリン）日本古美術展」は、私のもともとの研究テーマではありませんでした。二度のウィーン留学において進めていたのは、ウィーン世紀末美術の研究でした。しかし、1997年に早稲田大学の指導教授丹尾安典先生から、展覧会の図録を見せられて研究を勧められたことが、このテーマに関わるきっかけとなりました。

この展覧会には、当時の国宝と重要美術品に指定された作品が、全体の4分の3を占めており、今日においても海外での再現は困難と言われるほど、高い質を示していました。しかしながら、展覧会がナチスドイツの肝いりで行なわれ、日独両国の戦争への布石となったことから、戦後は語ることすら憚られる展覧会になってしまいました。同展の開会式にヒトラーが出席し、会場を巡覧したと聞けば、誰しも戦後に評価が難しくなった事情を理解できるでしょう。

それでもこの展覧会をテーマとしたのは、現在でも再現が困難なほどのレベルの高い日本美術の展覧会が、なぜナチスの時代に実現したのかという疑問からでした。

非常にセンシティヴな問題なため、研究には様々な障害がありましたが、日本はもちろん、ドイツでの関連資料を調査して、貴重な書簡や新聞記事等を入手することができました。

それらを解読することで、展覧会は、確かに政治動向への深い関わりを持つ一方で、ドイツにおける日本美術研究の深化にも支えられていたことが判明しました。

さらに本来は戦争とは無関係であるはずの美術展が戦争への布石になるうること、そして政治的危機が美術展の質を高める場合があることなど、さまざまな事情が明らかになりました。

また同展をめぐる批評において、露骨な政治的意図に基づくステレオタイプ化された論評が見られる一方で、ナチスの美術政策に対する批判性を保ってこの展覧会を論じた批評家の存在など、記憶に残すべき話題も掘り起こすように努めました。

現在、難民問題、北朝鮮問題、ヘイトスピーチなど、世界は緊張と対立の時代を迎え、まさにナチスの時代に見られたような、差別と排除、統制と暴力の危機が迫っています。それだからこそ、美術ですら戦争を導く役割を担い、差別の手段ともなったあの時代について、いま振り返る必要があると考えました。本書が平和を持続することへの一助となるように、心から願っています。

著者紹介
安松みゆき (YASUMATSU Miyuki)
別府大学文学部国際言語・文化学科 教授

『ローマ帝国の統治構造 ―皇帝権力とイタリア都市』

北海道大学出版会
2014年3月31日
定価　5,000円+税
227, 8頁

文学部史学・文化財学科
飯　坂　晃　治

ローマ帝国史の見直しへ

2014年に公刊された文字どおりの拙著『ローマ帝国の統治構造――皇帝権力とイタリア都市』（北海道大学出版会）は、筆者が2007年に北海道大学に提出した博士論文を書きあらためて出版したものである。そのおおまかな内容は次のとおりである。従来のローマ帝国史研究は、284年以降の後期ローマ帝国を中央集権的・財政至上主義的な「強制国家」と特徴づけ、2世紀以降の帝国官僚による都市自治への介入と、その結果としての都市の自治機能の低下に、ローマ帝国没落の一因をみていた。そこで筆者は、2世紀以降イタリア各地に派遣された都市監督官、地方裁判官、総督といった帝国官僚に注目し、その都市自治への影響を分析した。これらの帝国官僚はいずれも、都市の自治行政に貢献する活動をおこなっていた。イタリア都市は行政・財政上の問題を解決するために帝国官僚の介入や保護を求めていたため、帝国官僚の派遣にはそうした都市の需要に応える側面があったと考えられるのである。

一般に帝政ローマの歴史は、帝政前期（前27年～後284年）と帝政後期（284年～476年）に区分され、前期の帝国は自由放任主義的な「元首政」（プリンキパトゥス）のもとで繁栄を享受し、後期の帝国は国家統制主義的な「専制君主政」（ドミナトゥス）のもとで衰亡したと理解されている。上に後期ローマ帝国を「強制国家」とする学説を紹介したが、この学説は1920年代におけるファシズムの台頭を背景に唱えられたものである。しかしながら、後期ローマ帝国を「専制君主政」や「強制国家」とする理解は、戦後に大きく見直されるようになる。そうした研究動向のなかでもとくに重要なのは、1970年代に登場した「古代末期」論である。その提唱者P・ブラウンは、2・3世紀から7・8世紀までを、古代でも中世でもない、独自の価値をもつ「古代末期」とし、「古典古代」が長い時間をかけて本質的な「転換」・「変容」を遂げてゆく世界だとした（P・ブラウン、後藤篤子編『古代から中世へ』山川出版社、2006年などを参照）。この「古代末期」論のローマ史研究への影響は非常に大きく、「ローマ帝国はなぜ滅んだのか」という問いが発せられなくなり、後期ローマ帝国を「没落」や「衰退」とは異なる観点から捉え直す研究が活発化したのである。

本書はこうした研究動向に棹さしながら、ローマ帝国史の見直しを試みたものである。皇帝権力による都市自治への介入がただちに都市の衰退を招いたのではない、という点を強調したのも、こうした研究動向を念頭においてのことである。しかしながら近年では、文明の崩壊という観点からローマ帝国の「衰亡」をあらためて強調する研究もある（B・ウォード＝パーキンズ、南雲泰輔訳『ローマ帝国の崩壊　文明が終わるということ』白水社、2014年などを参照）。ローマ帝国の歴史的発展に関しては、今後も考究されるべき課題が数多く残されている。

著者紹介
飯坂　晃治 (IISAKA Koji)
別府大学文学部史学・文化財学科 准教授